ヨハネによる福音書 10:22-42；「何が問題なのか？」——2026年11月1日

I. ようこそ

A. おはようございます！おはようございます！カルバリー・チャペル岩国へようこそ。皆さんと共にここに集い、歌を通して、そして今、御言葉の学びを通して、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストを礼拝できることを大変嬉しく思う。

1. *初めてお越しの方や、オンラインで視聴されている皆様、ようこそ。*

B. 今朝の学びの時間に入る前に、小学生のお子様たちを日曜学校の教室へ送り出そう。

C. 子供たちが移動している間、残りの皆さんは聖書を開き、ヨハネによる福音書第10章の箇所を開いてほしい。

1. 今朝、聖書をお借りになりたい方は、周囲の椅子の下に置かれている聖書から、遠慮なくお取りください。皆さんがご自身で聖書を読み、私たちが節ごとに進めていくのに合わせて追いかけていくことは、とても重要だと考えています。

D. 今朝の聖書箇所は、ヨハネによる福音書第10章22節から42節だ。そして、今回の学びのタイトルは「**何が問題なのか？**」だ。

1. 本日、礼拝の締めくくりとして、聖餐のテーブルに集まり、主の晩餐を執り行う時間を設ける。

2. ヨハネによる福音書第10章を共に学ぶこの時間が、聖餐式に備える助けとなることを願っている。そして、聖餐式の時間が主によって祝福され、御霊に導かれるものであることを願う。

3. 今朝は学ぶべき聖書の箇所がかなり多く、時間は限られているので、早速本題に入ろう。

4. 先週は第10章の最初の21節までを取り上げたが、今朝は22節から再開し、42節で終わる章の終わりまで進んでいく。

5. 皆さんも、もうヨハネによる福音書第10章まで読み進めていることを願う。もしそうなら、神と神の聖なる御言葉に敬意を表して、立ち上がってほしい。

6. 私は自分の聖書から本文全体を読み上げるので、皆さんも自分の聖書でできるだけ追いかけてほしい。愛弟子ヨハネは、22節で次のように述べて、福音の説き明かしを続けている……（*R & P*）

II. ヨハネ10:22-24；

A. 今朝の聖書箇所は、献殿祭の時期の冬であり、イエスが再びエルサレムの神殿におられたと告げている。

1. さて、先週の聖句の21節と今週の22節の間には、時間の隔たりがある。

2. 先週は、別の祭りである仮庵の祭りにまつわる、ここ数章にわたって展開された出来事についてまだ扱っていた。

a. 私たちが仮庵の祭りと、その一週間にわたる祝祭の間に起こったすべての出来事を検討し始めたのは、ヨハネによる福音書第7章までさかのぼる。

b. 仮庵の祭りは、祭りの8日目に、イエスが盲人を癒やし、宗教指導者たちに「囲い」と「群れ」、「羊」と「羊飼い」について教訓を説いたことで最高潮に達した。

i. イエスは、ご自身が羊の「門」であること、そしてご自身の群れに加わる唯一の道はご自身を通ることであると彼らに教えた。

ii. また、イエスはご自身を「善き羊飼い」とも語った。いかに羊を愛し、世話をし、羊を知り、羊もイエスを知っているか、さらには羊のために命を捨てることさえあると語ったのだ。

3. しかし、22節では、時を飛ばして「献殿の祭り」の場面に移っている。

a. 仮庵の祭りは秋に行われたが、神殿奉献の祭りは仮庵の祭りの約2ヶ月余り後の初冬に行われた。

b. つまり、時は2ヶ月余り先へと進み、イエスは再びエルサレムに戻り、神殿にいて、同胞のユダヤ人たちと共に神殿奉献祭を祝っていたのだ。

4. さて、神殿奉献祭は、はるか昔、モーセの時代にイスラエルの民に与えられた七つの年次祭の一つではない。

a. 実のところ、これは紀元前164年頃に第二神殿が再奉献された後に始まった、比較的新しい祭りだった。

b. 実は、紀元前167年、セレウコス朝のアントイコス・エピファネス王がエルサレムに侵攻し、エルサレム市を包囲したのだ。

c. やがて彼はエルサレムの街と神殿を制圧した。彼の目的は、ユダヤ人をヘレニズム化させ、ギリシャの慣習に従わせ、ローマ帝国に勢力を奪われつつあった弱体化するセレウコス朝を、彼らを利用して強化することにあった。

d. こうして、アンティオコス・エピファネスはエルサレムを占領し、神殿を汚した。彼はユダヤ教を非合法化し、割礼や安息日の遵守、その他のユダヤ教の慣習といった基本的な実践を禁止した。

e. 彼はゼウスというギリシャの神の祭壇を設置した。彼は自らをゼウスの「現れ」であると主張していた（エピファネスという名は、彼が自らに付けた「現れた者」を意味する称号である）。彼は神殿内にこのゼウスの祭壇を設置し、その上で豚を犠牲として捧げ始めた。これにより神殿は完全に穢され、他のユダヤ人たちは彼に加わって、ゼウスへのこの不敬な生贄を捧げることを強要された。

f. 彼はさらに、全土に役人を派遣してユダヤ人の祭司たちにこれらの異教の生贄を捧げるよう強制したが、ある一人の祭司はこれに従わなかった。

g. マタティアという名のユダヤ人祭司は、犠牲を捧げることを拒み、代わりにアンティオコスが派遣した役人を殺害し、五人の息子たちと共にユダヤの荒野へと逃れた。

h. その後、息子たちがその使命を引き継ぎ、中でもユダという名の息子は、「マカベウス」という姓を名乗るようになった。これはアラム語で「槌」を意味する。

i. ゲリラ戦術を用いて反乱を成功させ、ついに神殿を奪還した。その後、異教の祭壇を取り除き、神殿を清め、紀元前164年に神殿を主への再奉献を行った。

j. 再奉献式は、2ヶ月前に過ぎ去ってしまった仮庵の祭りを補うため、8日間にわたる祭典として行われることになっていた。

k. 伝承によれば、この再奉献式の際、見つかったのは純粋なオリーブオイルが入った小さな瓶一つだけで、その量はたった一日分しか燃やせないほどだったという。

l. 口伝の記録であるタルムードによれば、新しいオリーブ油を作るには8日かかるはずだったが、彼らは待つことなく、神殿内のメノラに火を灯した。

m. そして伝承によれば、その油はたった1日分のはずが、奇跡的に8日間も持ち続けたという。そのため、神殿再献納祭は「光の祭」とも呼ばれ、今日ではより一般的に「ハヌカ」として知られている。ハヌカとはヘブライ語で文字通り「献納」を意味する。

B. さて、これが当時の光景だ。人々は、神を名乗ったセレウコス朝の王アンティオコス・エピファネスを打ち破ったユダ・マカベオスの勝利、すなわち神殿の再奉献を祝うためにエルサレムに集まってきている。

C. 人々は神殿を埋め尽くしており、イエスは神殿の東側の壁に沿って並ぶ列柱廊である「ソロモンの回廊」を歩き回っていたところ、ユダヤ人、すなわち宗教指導者たちが近づいてきた。

1. 単に近づかれただけでなく、イエスは包囲されたのだ。ここで使われている言葉は、誰かが完全に囲まれている状態を表すのに用いられる。彼らはイエスに迫り、逃げ道をすべて断とうとしていた。

2. 彼らはイエスを囲み、こう言った。「いつまで私たちを不安にさせるつもりか［あなたの訳では『じらしている』と読めるかもしれない］。もしあなたがキリストなら、はっきりと言え。」

a. ギリシャ語では、この表現は文字通り「魂を持ち上げる、あるいは支える」という意味だ。彼らが本質的に言っているのは、「何が遅れているんだ？」「なぜ私たちを宙ぶらりんにしておくのか」「待たせているのか」ということだ。

b. もしあなたがキリストなら、はっきりと言え。ここでいう「もし」という言葉は、いわゆる第一類条件文で書かれている。第一類条件文は「〜であるから」と訳すこともでき、何かが真実であると仮定されているというニュアンスを含む。

c. とはいえ、これはユダヤ人たちがイエスをキリストだと信じていたという意味ではない。彼らはイエスを罠にかけようとしていたのだ。イエスに自白させ、自分たちに対して不利な証拠となるような発言を引き出そうとしていた。「あなたがキリストであるなら、はっきりと言え。遠回しな言い方はやめろ」、「はっきりと言ってみろ」といった感じだ。

3. ここで、ユダヤ人たちとその状況に関して、私たちが認識し理解すべき点がある。

a. 彼らがイエスをメシアとして信じなかったのは、**情報が*不足***していたから**ではない**。すでに提示されていた情報を受け*入れる*気がなかったからだ。

b. もし彼らが証拠に従い、その証拠が導く当然の結論を受け入れていれば、イエスが実際に誰であるかを理解できたはずであり、あれほど大きな過ちを犯すことはなかっただろう。

4. 彼らには、キリストがどのような存在であるべきかという独自の考えがあった。彼らは、キリストが軍事指導者であると信じていた。彼らは、新たなユダ・マカベウスのような、現れて新たな反乱を率いる軍事的な「鉄槌」を待ち望んでいたのだ。彼らは、ローマの占領に対して反乱を率いる人物、すなわち彼らを解放し、地上に神の王国を築く征服者を求めていた。

5. メシアがどのような存在であるべきかという彼ら自身の先入観や固定観念ゆえに、イエスは彼らのイメージに合わないという理由で、自動的に候補から除外されてしまったのだ。しかし、彼らのイメージは間違っており、不完全だった。彼らは自分たちが見たい部分だけに焦点を当て、他の部分は無視していたのだ。

a. 旧約聖書は、メシアを「苦しむしもべ」として描いている。イザヤ書53章が最も広く知られた例だ。しかし、他にもある。詩篇22篇は、嘲笑する者たちに囲まれながら、手と足を刺し貫かれるメシアについて語っている。ゼカリヤ書12章は、人々が「自分たちが刺し貫いた者」を見つめて嘆き悲しむ様子を述べ、ダニエル書9章は、生ける者の地から断ち切られる「油注がれた者」について語っている。

b. 手がかりはそこにあったのだが、彼らは、自分たちが思い描いていた、あるいはメシアに望んでいた像に合致しなかったため、それらを無視してしまったのだ。

D. さて、本文を読み進め、神殿でイエスを取り囲んだユダヤ人たちに、イエスがどのように応答したか見てみよう。25〜30節を一緒に読もう。

III. ヨハネによる福音書10章25〜30節；

A. 宗教指導者たちは「はっきりと言え」と言ったが、イエスの答えは「すでに言った」だった。

1. イエスはご自身の正体について、いくつかの大胆な発言をしてきた。

a. ヨハネ2章16節で、イエスが神殿に入り、机をひっくり返して皆を追い出し、神を自分の父だと主張した。イエスは「これらをここから取り除け！　わたしの父の家を商売の場にしてはならない」と叫んだ（**ヨハネ2:16**）。

b. ヨハネによる福音書第4章で、イエスが井戸端の女と出会ったとき、彼女は「『メシア（キリストと呼ばれる方）が来られることは知っている』。『その方が来られたら、私たちにすべてのことを教えてくださる』」と言った。イエスは彼女に、「あなたと話している私こそ、*その人だ*」と言われた。（**ヨハネ4:25-26**）

c. サマリアの村人たちは皆、イエスがメシアであることを理解し、こう述べた。「今や私たちは信じる。あなたが言ったからではなく、私たち自身がその方の声を聞き、この方がまことにキリスト、すなわち世の救い主であることを知ったからだ。」（**ヨハネ4:42**）

d. ヨハネによる福音書第5章で、イエスは再び父との神聖な関係を主張し、「わたしの父は今までも働いておられ、わたしも働いている」と語った。[そしてユダヤ人たちは、イエスが何を言おうとしているのか正確に理解していた。なぜなら、その直後の節にはこう記されているからだ]「それゆえ、ユダヤ人たちはなおさらイエスを殺そうとした。イエスは安息日を破っただけでなく、神を自分の父と呼び、自分を神と等しい者と見なしたからである。」（**ヨハネ5:17-18**）

e. 第8章で、イエスはこう言われた。「わたしは世の光である。わたしに従う者は、決して暗闇の中を歩むことはなく、いのちの光を持つ。」（**ヨハネ8:12**）

f. イエスはこう言われた。「……もしあなたがたが、『わたしこそが「わたしはある」である』ということを信じないなら［「わたしはある」はイタリック体で、要するに『神がご自身について名付けた「わたしはある」という名こそが、わたしである』ということを信じないなら］、あなたがたは自分の罪の中で死ぬことになる。」（**ヨハネ8:24**）

g. その後、第8章の後半で、イエスは再びこう言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げる。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』のだ。」と、ご自身が誰であるかを大胆に宣言し、再び神の御名を自らに冠されたのである。（**ヨハネ8:58**）

h. イエスは、神によって遣わされた神の子であり、待ち望まれていたメシアであるというご自身の正体について、多くの言葉を語られた。しかし、人々はイエスの言葉を信じなかった。

2. そして、彼らがイエスの言葉を信じなかったため、イエスは御自身の行いを指し示した。まるで、「もし私の言葉だけでは不十分なら、父の名によって成し遂げた行いを見てみればよいではないか」と言わんばかりに。それらの行いもまた、イエスが誰であるかを証ししており、イエスがキリストであることを証言しているのだ。

a. 洗礼者ヨハネが落ち込んでいた時、獄中で自身の処刑を待つ中、イエスやその正体について微妙な疑念が忍び込み始めたため、彼は弟子たちをキリストのもとへ遣わし、イエスが本当にメシアであるかどうかを尋ねさせた。

b. イエスはヨハネの弟子たちにこう言われた。「行って、ヨハネに、あなたがたが見聞きしたことを伝えなさい。盲人は見え、足の不自由な者は歩き、らい病人は清められ、耳の聞こえない者は聞き、死者はよみがえり、貧しい人々に福音が宣べ伝えられている。」（**マタイ11:4-5**）

c. これらは、メシアの働きに伴って現れると預言されていたしるしであった。イザヤ書35章は、メシアに関するこれらの事柄について、「盲人の目が開かれ、耳の聞こえない者の耳が開かれる。その時、足の不自由な者は鹿のように跳ね回り、口のきけない者の舌は歌う」（**イザヤ35:5-6a**）と述べている。

d. イザヤ書61章にはこう記されている。「主なる神の御霊がわたしの上にある。主は、貧しい人々に福音を宣べ伝えるために、わたしに油を注がれた。主は、心を砕かれた者をいやすために、捕らわれ人に解放を告げ、囚人に自由を告げるために、わたしを遣わされた。」（**イザヤ61:1**）

e. ルカによる福音書によると、イエスは地上の宣教の初めに、会堂に立ち、イザヤ書61章を直接読み上げ、「今日、この聖書の言葉が、あなたがたの耳で聞いたとおり、成就した」（**ルカ4:21**）と述べた。

f. イエスが行ったこと、すなわち御業やしるしは、イエスが誰であるかを示す証拠であった。イエスは神の子であり、ユダヤ人のメシアであった。

3. 主が語られた言葉も、行われた御業も、主が神の子であり、ユダヤ人のメシアであるという**<u>主の正体を証ししていた</u>**。しかし、ユダヤ人たちはその両方を否定した。

B. そして26節で、イエスは彼らがなぜ御言葉も御業も信じないのかを明らかにしている。それは、彼らがイエスの羊ではなかったからだ。

1. イエスが呼びかけると、御自身の羊たちは応答し、やって来てイエスに従った。彼らはユダヤ教という羊小屋を離れ、善き羊飼いであるイエスの見守る目と愛に満ちた心のもと、イエスの群れに入ったのだ。

2. イエスはユダヤ人たちや宗教指導者たちに呼びかけたが、彼らはイエスの言葉を聞こうとせず、イエスに従おうともしなかった。それゆえ、彼らがイエスの羊ではないことが証明されたのだ。

3. イエスの羊はここに御声を聞き、イエスは彼らを知っておられ、彼らは本テキストの27節にある通り、イエスに従うのだ。

4. イエスはさらに、御自身の羊について、彼らに永遠の命と永遠の確かな救いが与えられると述べている。

a. 霊的な永遠の命だ。イエスに従うことは、不死となり、肉体的に決して死ななくなることを意味するのではない。イエスが語っているのは、天国で永遠にイエスと共に過ごす霊的な命のことである。

i. イエスは、彼らが決して滅びることはないと約束している。ここでイエスは、ギリシャ語において可能な限り最も強い否定形、すなわち仮定法を用いた二重否定を用いている。彼らはいかなる状況下でも、決して滅びることはない。それは不可能なことなのだ。彼らは永遠に、主のものとして封印されている。

b. 永遠の安全とは、いかなる外部の力も、イエスや御父の手からその羊を奪い去ることは決してできないということだ。御父と御子は共に、その羊をしっかりと握りしめている。

i. 何ものも、誰一人として、神が私たちをしっかりと握りしめているその手から、主の羊を奪い去ることはできない。私たちは、主の羊であるという立場において、確固たる安全を保っているのだ。

ii. これは、ユダヤ教において、自分の発言を快く思わない宗教指導者によって破門される可能性がある人々とは対照的だ。決まりに従い、言われた通りに言動しなければ、追放されてしまう。宗教指導者たちはこの権力を民衆に対して行使し、民衆を恐怖の中で行動させ続けた。

iii. イエスは、外部の影響によって自分の羊が群れから引き離されることなど、絶対にあり得ないと語った。それは決して起こらない。それもまた不可能なことなのだ。

c. 28節は、真の信者の永遠の安全について語る、聖書の中でも最も素晴らしい聖句の一つだ。永遠の命は、キリストと、*キリストが*私たちをしっかりと支えてくださる*力*の中に、そしてそれを通して保証されている。**<u>それは</u>**、**<u>私たちがキリストにしがみつく能力に基づいているのではない</u>**。

d. 何ものも、また誰も、全能の神やその御子の御手から私たちを奪い去ることはできない。私たちの未来がイエス・キリストにあって、またキリストを通して確かなものであることを知り、慰めを受けよう。

5. イエスが「わたしと父とは一つである」と言われたとき、実際には「わたしと父とは一つである」と読むべきだ。「わたしの」はイタリック体で表記されており、翻訳に使われた写本には含まれていないことを意味する。しかし、定冠詞はそこにある。これは単にイエスの父について語っているのではなく、彼が言及しているのは天にいます「唯一無二の父」なのだ。

a. イエスと父は一つである。彼らがまったく同じ人物であるという意味ではなく、本質において一つであるということだ。彼らは一つに結ばれている。彼らの意志と願いは完全に一致している。彼らは一つとして行動する。二人を分離したり、互いに対立させたりすることはできず、彼らは一つとして結ばれているのだ。

b. そしてユダヤ人たちは、イエスがまさにそのことを語っていることを知っていた。31〜33節にあるイエスの言葉に対する彼らの反応を見れば明らかだ。

IV. ヨハネによる福音書 10章31〜33節；

A. イエスが御父と一つであると主張したのを聞くと、ユダヤ人たちはすぐに石を拾い、イエスを殺そうとした。彼らはイエスに対する怒りと憎しみに満ちきっており、法的な調査や裁判など考える余地もなく、自分たちの手で決着をつけようとしていたのだ。

B. しかし、イエスは彼らを制止し、要するに、どのような行いをしたためにそのような反応を招いたのか、父のどの業が石打ちの刑に値するものだったのかと問いかけた。

C. 彼らは、イエスの行いではなく、その言葉のせいだと答えた。イエスが自らを神であると称したからだ。彼らにとって、それは冒涜に他ならなかった。

1. 冒涜とは、神に対して悪を語ることであり、神の栄光や本質に反したり、それに敵対したりする言葉を口にすることだ。

2. 誰かが自分こそが神である、あるいは神と一つであると主張することは、神に対する冒涜となる。堕落した人間の肉体が、全能の神の完全さに匹敵し得ると考えることは、神を貶め、神のみにふさわしい栄光を奪うことになる。

3. したがって、堕落した人間が、自分が神であるとか、神聖な性質を持つとか、神と同等であると主張するなら、それは確かに冒涜となる。しかし、イエスは堕落した人間ではない。イエスは完全であり、神聖であり、父と一つである。だから、それが真実であるならば、それは冒涜ではないのだ。

D. 興味深いのは、宗教指導者たちがイエスの行いを「善行」と表現したことだ。彼らは「善行のためなら、あなたを石打ちにはしない」と言った。彼らは、イエスが行った行いや、しるしや奇跡が善であることを知っていたのだ。

1. 彼らは、イエスに奇跡を行う力があることを否定しなかった。イエスが安息日に人々を癒やしたとき、彼らはイエスに腹を立てたが、その行いそのものを否定はしなかった。否定できなかったのだ。

2. ファリサイ派の一人であるニコデモは、夜陰に紛れてイエスのもとを訪れ、こう明確に述べた。「ラビ、私たちは、あなたが神から遣わされた教師であることを知っている。神が共におられない限り、あなたがなさるようなしるしをなす者はいないからだ。」（**ヨハネ3:2**）

3. しかし、イエスの行いが素晴らしいとか、イエスが優れた教師だと言うだけでは不十分だった。人々はイエスを優れた教師として、奇跡を行う者として、あるいは単に道徳的な模範として称賛することはできるが、最終**<u>的には誰もが</u>**、**<u>イエスが神であるという主張に対して答えを出さなければならない</u>**。

4. イエスは、私たちが単に彼を「立派な教師」や「奇跡を行う者」、あるいは「良き模範」として称賛するだけでは済まさない。私たちは、イエスが何者であるか、そして神性に関する彼の主張について、決断を下さなければならない。

5. イエスはご自身が神であると主張された。聖書は、イエス・キリストが神であることを極めて明確に述べている。

a. トマスは、イエスについて「わが主、わが神！」と言ったとき、イエスが神であることを宣言したのだ（**ヨハネ20:28**）。

b. パウロは、テトスへの手紙の中で、私たちの偉大なる神であり救い主であるイエス・キリストの祝福された希望と栄光ある現れについて記した際、イエスが神であることを宣言した。（**テトス2:13**）

c. ローマ人への手紙の中で、パウロはキリストについて、キリストがいかに至高であり、永遠に祝福された神であるかを語っている。（**ローマ9:5**）

d. イザヤ書9章6節には、「見よ、私たちに子どもが生まれた。私たちに息子が与えられた。その肩に統治の重荷がのしかかる。その名は『驚くべき者、助言者、全能の神』と呼ばれる。」（**イザヤ9:6a**）とある。

e. ヘブライ人への手紙の著者は、聖書が御子について「神よ、あなたの御座は、永遠に、また永遠に続く」と語っていることを引用し、イエスが神であることを記している。（**ヘブライ人への手紙 1:8a**）

6. 聖書はそれを極めて明確に示している。イエスは神である。そして、誰もが、イエスが神であることを信じるかどうか、また、イエスの証言や、聖書がイエスについて明確に述べていることに同意するかどうか、決断を下さなければならない。

E. さて、イエスが冒涜の罪に問われたことに対し、どのような答えを述べたのか見てみよう。34節から39節までを一緒に読んでみよう。

V. ヨハネによる福音書 10章34節〜39節；

A. イエスはここで、彼らの迫害や告発に対して、実に巧妙な対応をとった。イエスは神の御言葉に目を

向けたのだ。

1. イエスは詩篇82篇を引用している。詩篇82篇では、この詩篇を書いたアサフが、地上である種の裁き人として振る舞う者たちと神が会っている様子を描いている。
2. ヘブライ語では「エロヒム」という言葉が使われている。「エロヒム」という言葉は神を指す場合もあるが、他の霊的な存在や、さらには人間の裁判官を指す場合にも使われる。
3. 詩篇82篇6節にはこう記されている。「わたしは言った、『あなたがたは神々（エロヒム）であり、あなたがたはみな、いと高き方の子らである』」（**詩篇82:6**）
4. このように、聖書の詩篇において、人間が「神」であり、「至高者の子ら」であると述べられていることが分かる。
5. そこで、イエスは基本的にこう問うのである。もし詩編の作者が、神ご自身以外の存在を「神々」と呼び、また「至高者の子ら」と呼ぶことが許されていたのなら、なぜ父に聖別され、この世に遣わされた私にとって、それが冒涜となるのか。
6. イエスは、より小さなものからより大きなものへと論を展開している。アサフがそのようなことを言うのが許され、それが私たちに与えられた聖書の一部とみなされているのなら、アサフよりも偉大な私が同じことを言うのはなぜ許されないのか。私は父ご自身によって遣わされ、父によって聖別されたのだ。それなのに、私が「私は神の子である」と言うことが、なぜ冒涜になるのか。
7. ここでイエスが用いている論理が理解できるか。堕落した人間であるアサフがこう言うのが許されるのなら、なぜ私がそう言うのが許されないのか。
8. イエスは再び、彼らを逆転させた。彼らはイエスを追い詰めたつもりだったが、イエスは神の御言葉を用いて自らの主張を正当化し、彼らの告発を容易にかわしたのだ。

B. しかし、彼らを徹底的に打ちのめす代わりに、37節と38節にはイエスの真の心が表れている。イエスは彼らに信じるよう懇願する。そして、彼らにイエスに応答するさらなる機会を与えているのだ。
1. 彼は彼らに、自分の行いを見てほしいと懇願する。証拠そのものが語るようにと。彼はこう言う。「もし私が父の行いをしないのなら、私を信じてはならない。*しかし*、もし私がそれを行うなら、たとえあなたがたが私（と私の言葉）を信じなくても、その行いを信じなさい」。*「せめて、その行いそのものが語るようにしなさい。それらが、唯一あり得る結論へとあなたたちを導くようにしなさい。そうすれば分かるだろう*」というのが、その趣旨だ。
2. そうすれば、あなたがたは、父がわたしの中にあり、わたしが父の中にあることを知り、信じるようになるのだ。
3. イエスは今もなお、彼らに信じさせようとしている。証拠に従い、それが彼らを導いて、父がイエスの中にあり、イエスが父の中にあることを知り、信じるようにするためだ。
4. 彼らがイエスを逮捕し、殺そうと何度も試みた後であっても、イエスの心は、彼らが罪深い道から立ち返り、イエスを信じるようになることを願っているのだ。
5. これは、**主の寛容さを**私たちに浮き彫りにしている。主の恵みと憐れみが余すところなく示されているのだ。たとえ彼らが主とは一切関わりを持たず、絶えず主に抵抗しようとしていても、主は依然として彼らを愛し、彼らが罪から立ち返ることを望み、そうするためのさらなる機会を与えているのだ。

C. そして、彼らは主の恵み、憐れみ、そして忍耐にどう応えたのか。39節によると、彼らは再び主を捕らえようとした。つまり、逮捕しようとしたのだ。
1. 主が示された愛と憐れみにもかかわらず、ユダヤ人たちは証拠が示すところを受け入れようとしなかった。彼らは自分の考えに固執しており、何ものも彼らの心を変えることはできなかった。
2. そして、彼らがイエスを完全に包囲していたにもかかわらず、イエスは再び彼らの手から逃れられた。イエスの時はまだ来ていなかったのだ。

D. 本文の最後の節を見て、ここでまとめを行い、聖餐の時間に移ろう。40〜42節を一緒に読もう。

VI. ヨハネによる福音書 10章40〜42節；

A. イエスは宗教指導者たちの前から立ち去り、ヨルダン川を渡って、洗礼者ヨハネが洗礼を授けていた場所へ向かった。
1. ここには、ある種の「一周回って元に戻る」ような瞬間がある。イエスは、この地上の宣教が最初に始まった場所に戻り、これをもって、宗教指導者や多くの一般大衆に向けたイエスの公の宣教に関するヨハネの記録は幕を閉じる。
2. ここからは、イエスは弟子たちや、イエスに従っていた人々へと、より内向きに目を向けるようになるようだ。外向きの宣教活動は終わり、次は弟子たちを次の段階に向けて備えさせる時が来たのだ。
3. この時点から、イエスが過越の祭りのためにエルサレムに戻り、私たちの過越の小羊として十字架上で自ら進んで命を捧げるまで、約三ヶ月半ある。
4. イエスはこの最後の数ヶ月間、実際に信じ、従っている者たちへの奉仕、すなわち御自身の羊たちへの奉仕と世話に注力した。

B. イエスが荒野におられたとき、洗礼者ヨハネの証しを覚えていた多くの人々が、イエスのもとへやって来た。そして、ヨハネがイエスについて語ったすべてのことを思い起こすうちに、彼らはヨハネの言ったことはすべて真実であると結論づけ、その場所で多くの人がイエスを信じた。
1. イエスを信じるようになったこれらの人々は、イエスを否定した宗教指導者たちとは鮮明な対照をなしている。
   a. 宗教指導者たちは多くの奇跡を目撃し、何度かイエスと直接顔を合わせて話もした。しかし、彼らは心を頑なにして信じようとはせず、悔い改めてイエスを信じる代わりに、イエスを捕らえて殺そうとしたのだ。
   b. ヨルダン川を越えてイエスのところに来たこの洗礼者ヨハネの弟子たちは、いかなる奇跡も目撃しておらず、持っていたのは洗礼者ヨハネの証言だけだった。イエスとの関わりもはるかに少なく、反応する機会も少なかったにもかかわらず、彼らは心を開き、手元にある証拠に従い、イエスに希望と信仰を置いたのだ。
2. 問題は、証拠が不十分だったことではなく、神が与えてくださった証拠にどう応答するかという点にあった。ヨルダン川を越えてイエスのところに来た人々は、多くの証拠を持っていなかったが、

それに応えたのだ。宗教指導者たちは山ほどの証拠を持っていたが、それには応じようとしなかった。**ここでの問題は、神が私たちに与えてくださった証拠に、私たちがどう応えるかということだ**。

a. 証拠を与えられながら、さらに多くを要求する人々は、ファリサイ派の人々のようなものであり、おそらくどんな証拠があっても決して満足することはないだろう。

b. しかし、もしあなたが神から与えられた証拠に従い、それがあなたを神のもとへと導くのを許すなら、神はあなたを御自身のものとして迎え入れてくださる。もしあなたが神の御声に耳を傾け、その呼びかけに応えるなら、あなたは神の群れに迎え入れられ、神の羊の一匹となるのだ。

3. 今朝ここにいるが、まだ信者ではない人へ、私が問いたいのは、「何が妨げになっているのか」ということだ。何が、あなたが神の声を聞き、神を知り、神に従うことを妨げているのか。永遠の命と永遠の救いが、その一線にかかっているのだ。

4. 信者である皆さんに対しても、主との歩みに関して、同じ質問を投げかけたい。キリストをより深く知る上で、何が妨げになっているのか。主とその導きに完全に従う上で、何が妨げになっているのか。主の呼びかけに耳を傾け、完全に主に従おう。

C. さて、ここから聖餐の時間に移る。礼拝チームが再び壇上に戻り、案内係が聖餐の要素を配る準備をする。

1. 聖餐式は、私たちが救い主と出会う機会だ。振り返って、主が私たちのためにしてくださったことを思い起こすだけでなく、単に神に自分の心を調べてもらう時でもある。

2. パウロがコリントの教会に指示を与えた際、パンと杯をいただく前に、まず自分自身を吟味すべきだと記した。それは、神が私たちとの歩みの中で、働きかけたいと願う部分を明らかにしてくださる機会を与えるためである。

3. 私の願いと祈りは、聖餐の時間に私たちが主の御声を聞き、主が導き、導いてくださる通りに応答することだ。

4. 今朝ここにおられながら、まだ信者でない方がいらっしゃるなら、その方が神に身を委ね、神の呼びかけに応えてくださることを祈る。しかし、そうでない場合は、聖餐の要素を摂取しないようお願いしたい。案内係が聖餐の要素を配る際、摂取しないことを伝えるために、手振りでそっと合図をしてほしい。誰一人として、ふさわしくない態度で聖餐の要素を摂取してほしくないのだ。

5. 聖餐は、主の羊たちが行うものである。それは、私たちが主と一つになる一つの方法だ。

a. パンと杯をいただくとき、私たちは、私たちのためにカルバリの十字架にかけられた主の砕かれた御体を思い起こすのだ。

b. 私たちのために注がれた主の流された血を思い起こすのだ。

6. 私たちはキリストの御業を思い起こし、信仰をもって、また十字架上の御業と、私たちのために勝ち取られた勝利を受け入れて、聖餐に与るのだ。

7. これから礼拝チームが礼拝の時間を導いてくれる。主の導きに従って、遠慮なく彼らと共に礼拝に参加してほしい。私はもう壇上には戻らない。皆には、主の導きに従って聖餐に与ってほしい。

8. もし礼拝チームの歌が終わるまでに聖餐に与えていない場合は、その時点で指示があるのでそれに従い、その後、解散前の最後の賛美へと導かれる。

9. 皆さんが主と共に過ごすこの時間を通して、主が祝福を与え、御心を示してくださるよう祈る。さあ、私たちの良き羊飼いと共に、しばらく時を過ごそう。